ISSN 1884-7730

# 安曇野ちひろ美術館
# 美術館だより

No.78
2014.4.21

## ちひろ没後40年　ちひろの愛した アンデルセンと宮沢賢治

●2014年5月16日(金)～7月22日(火)

協力：宮沢賢治記念館・林風舎

時代を超えて語り継がれる童話をつむぎ出したアンデルセン（1805～1875）と宮沢賢治(1896～1933)。多くの画家たちが彼らの童話を作品に描いていますが、いわさきちひろもまた、画家として、人として、二人の作家に大きな影響を受けた一人でした。本展では、画家ちひろにとって重要な存在である二人に焦点をあて、その世界観をちひろがどのように昇華し、形にしていったかを探ります。

**宮沢賢治**

終戦の翌日の1945年８月16日から約１ヶ月にわたり、ちひろは「草穂（くさほ）」と題した日記に、スケッチや心に去来することを書き留めていました。８月18日、「宮沢賢治」の名前が登場し、「いまは熱病のようになってしまった」と記しています。日本が戦争へと進むなか、ちひろは賢治の童話や詩に出会いました。敗戦後、世の中の価値観が一変するなかで、自らの歩む方向を必死で模索していたちひろは、岩手の自然を源に、豊かな感性でつむぎ出される賢治の作品世界や、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という純粋な思想に感銘し、一層心酔していきました。人々のために尽くした賢治の存在は、ちひろのその後の生き方にも大きな影響を与えています。

24年後の1969年、草花や木を主人公とした６編を収めた『花の童話集』（図１）で、賢治の童話を手がけたちひろは、この絵本を「わたしの宮沢賢治解釈」と語っていました。賢治が愛した岩手の自然を、ちひろは、アトリエを兼ねて建てた山荘があった信州・黒姫の自然なかに見出しました。小さな生命を慈しみ、対話する賢治のまなざしに自らのまなざしを重ね、自然の持つ本質的な美しさを作品のなかに描き出しています。

**アンデルセン**

終戦の翌年、画家を目指して単身上京したちひろは、アンデルセンの「お母さんの話」を紙芝居に描く仕事をきっかけに、画家として立つことを決意しました。以後、毎年のように描き続けるなかで、「アンデルセンの童話のもっている夢が、たいへんリアルであるということが、現代のわたしたちの心にもつうじる」と語っています。人間の心のひだを丁寧に辿り、普遍的な悲しみを美しく描き出した童話に、ちひろは深く共感していました。

人間の王子に恋をした人魚の少女の悲恋の物語「人魚姫」。姉たちから、王子の命を奪えば人魚の世界に戻れると告げられた人魚姫が、ナイフを手に王子の寝室に入る場面を、ちひろは何度か描いています。1960年の紙芝居（図２）では、眉を寄せて煩悶する人魚姫の表情を描きました。一方、1967年の絵本（図３）では、人魚姫を後ろ姿で描き、王子の顔もカーテンで隠していることがわかります。二人の表情を描かないことで、見る人の想像力を喚起する表現へと変化しています。「なんかいかいても、なお工夫するたのしさを、わたしはいまだに失なわないでいる」と語っていたちひろ。説明的な描写を抑えることで、読むたびに新たな解釈が生まれるアンデルセン童話の魅力を表現していったことがうかがえます。

二人の作家の作品を通して、ちひろが結実させていった表現の数々をご覧ください。　（宍倉恵美子）



## 〈企画展〉ブラジルからやってきた！色彩の画家　ホジェル・メロ展

●2014年5月6日(金)～7月22日(火)

企画：Internationale Jugendbibliothek　ミュンヘン国際児童図書館
後援・協力：駐日ブラジル大使館 EMBAIXADA DO BRASIL EM TÓQUIO、一般社団法人日本国際児童図書評議会（JBBY）

ホジェル・メロは、ブラジルで今注目される絵本画家であり、作家、脚本家でもあります。メロは、1964年から1985年まで続いた軍事政権下で自由を求めて表現し続けた児童文学作家や画家たちの影響を受け、その一人であるブラジルを代表するイラストレーター、ジラウド(1932～）の元で働きました。最初の自作絵本は1990年に出した*La Flor del lado de allá*（向こう側の花）という文のない絵本で、視点が変化するおもしろさを伝えています（図１）。以後、現在までに100冊近い本の絵を手がけ、そのうち20冊には、自ら文章も書いています。2014年３月、メロは国際アンデルセン賞画家賞をブラジル人画家として初めて受賞しました。受賞説明では、「彼のイラストレーションは革新的かつ包括的であり、世界の文化と伝統への寛容と尊重を促す絵が組み込まれている。」と述べられています。

本展では、ミュンヘンの国際児童図書館が2011年に企画した展示に出展された12冊の絵本原画88点と、絵本制作の過程がわかるダミー、愛用品などあわせて100点以上の作品と資料を日本で初めて紹介します。

メロの絵本の魅力のひとつは、内容や本の形態、技法の多様性です。

*Meninos do mangue*（マングローブの男の子たち）は、マングローブの沼地でカニを採りながら暮らす子どもたちが主人公の物語です。沼地に暮らす人たちが、ゴミを拾って新たなものに変えるのを見てインスピレーションを受けたメロは、黒い薄いビニールを背景に貼り、その上に絵の具で人物を描いた後、紙などをコラージュしてストーリーを表現しています。（図２）

「*Maria Teresa*（マリア・テレーザ）」は、ブラジルを流れるサンフラシスコ川を航海する舟の船首が主人公の話です。獅子の頭をしているにもかかわらず、川に現れる怪物に怯えるなど、ユーモラスな冒険が語られます。絵は、メロが影響を受けたと語るブラジルの民族芸術を思わせる温かな色と構図で、川辺の豊かな風景を描写しています(図３)。２冊とも異なるスタイルの絵本ですが、絵と物語の呼吸が見事に合っています。

ブラジルの祭や伝統文化を絵本に取り込む一方で、社会的視点も持ち合わせた絵本も作っているのがメロのもうひとつの特徴です。前述の「マングローブの男の子たち」もそうですが、*Carvoeirinhos*（炭売り少年たち）は、１匹のクマバチの視点から、工場で不法に働く貧しい男の子の行動を見つめる絵本です。表紙を含め、灰色や黒色が画面を占めるなか、火の色が鮮やかな蛍光色で時々使われ、特に見開きで工場の内部が描かれるページは圧巻です（図４）。

近年は、モノクロの写真と立体作品をコラージュした絵本や、ことばの全くない絵本など、実験的な絵本にも取り組んでおり、彼の絵本づくりに対する飽くなき挑戦がうかがえます。さまざまな背景の文化を取り入れて共生発展してきたブラジルの魅力を、メロの作品は体現しているといえるでしょう。　（松方路子）

おやゆび姫　1972年

図1　ひなげし　『花の童話集』（童心社）より　1969年

図2　王子の寝台に近づく人魚姫
『七色の珠玉選 人魚ひめ』（童心社）より　1960年

図3　王子の寝台に近づく人魚姫
『にんぎょひめ』（偕成社）より　1967年

青い花と小鳥と子ども　1972年

## ●展示室4

図1　『向こう側の花』1990年
（展示は絵本資料のみ）

図2　『マングローブの男の子たち』より　2001年

図3　『マリア・テレーザ』より　1996年

図4　『炭売り少年たち』より　2009年

ホジェル・メロ
Roger Mello　1965〜

ブラジリアに生まれる。リオデジャネイロ州立大学の工業デザイン学校でデザインを学び、国民的イラストレーターのジラウドのアトリエで働く。1990年から現在にいたるまで100冊近い絵本を出版し、うち20冊は文章をも自ら書く。絵本の他にアニメーションや演劇作品も手がける。国内外で数々の賞を受賞し、2014年3月にはブラジル人画家として初めて国際アンデルセン賞を受賞した。リオ・デジャネイロ在住。

## ちひろ美術館コレクション　世界の画家たちの愛した アンデルセンと宮沢賢治

●2014年5月16日(金)～7月22日(火)

時代も国境も超えて多くの人々に愛される童話を残したアンデルセンと宮沢賢治。多くの画家が彼らの童話の絵本化に挑んできました。本展では、世界の絵本画家が描いた二人の童話の作品を紹介します。

**アンデルセン**

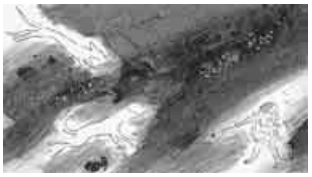
『おやゆびひめ』より
ヤナ・キセロヴァー・シテコヴァー(スロヴァキア) 2001年

「おやゆびひめ」は、花から生まれた小さな女の子の物語です。キセロヴァーは、この童話について、「気づかれないほど小さく無防備、しかし、とても勇敢。このことは私にとっても驚きです」と語っています。画家は、おやゆびひめを動植物よりも大変小さく描くことで、幻想的な世界を表す一方、東欧の衣装を着た普通の女の子の姿で表しました。ファンタジーの世界のなかに、人間の心の機微や人の世の真実を描いたアンデルセン童話を、キセロヴァーは、運命に翻弄されながらも、たくましく生きる少女に焦点を当て、描いたことがわかります。

**宮沢賢治**

『セロひきのゴーシュ』より　茂田井武（日本）1956年

「セロひきのゴーシュ」は、町の楽団に所属する青年の物語。茂田井武は、最晩年に賢治のこの物語を絵本に描きました。当時、病床にあった茂田井でしたが、編集者からの絵本化の依頼に、「賢治のゴーシュでしょう。それが出来るなら、ぼくは死んでもいいですよ」と答えました。茂田井は、親友の画家がつくった茂田井自身がモデルの人形にゴーシュの姿を見出し、様々なポーズを取らせながら、ゴーシュのイメージを掴んだといいます。茂田井の描いたデフォルメされたゴーシュの姿は、孤独を抱え、不器用に生きるゴーシュの生き方を豊かに表しています。



『水仙月の四日』より赤羽末吉（日本）1969年

茂田井の『セロひきのゴーシュ』を見て、絵本画家への道を歩んだ赤羽末吉にとっても、賢治童話は思い入れの深い題材でした。吹雪の一夜を描いた『水仙月の四日』は、絵と文が響き合う絵本表現の可能性を追求したいと、それまでにない技法に取り組んだ作品です。雪国の冷たく深い空を表現するために、銀箔を下地に使い、童話のもつ硬質な詩情を表すためにボールペンの線を使うなど、さまざまな画材を駆使し、賢治の作品のシャープさと硬質な質感を描き出しています。

二人の美しい物語と響きあう、画家たちの個性豊かな作品をお楽しみください。

（長井瑶子）



## ちひろ没後40年記念出版について

一昨年公開されたドキュメンタリー映画「いわさきちひろ～27歳の旅立ち～」。それを見て、「もっといろいろな証言を知りたい」という声も多く寄せられました。この映画は、2008年より生前のちひろを知る方々を訪ねて、ちひろの思い出を語っていただいたもの。現在、それら膨大な取材記録から、証言集の編集を進めています。黒柳館長や高畑勲さんへのインタビューはもちろん、ちひろの人柄や画業に関する話をまとめたこれまでにない証言集となります。ここでは、予告として、おふたりのかたの証言の一部をご紹介します。(7月、新日本出版社より刊行予定)

＊　＊　＊

証言1《黒川万千子さん　戦後間もない頃の松本善明とちひろの出会いの様子を語る》

1950年頃、御茶の水に民主主義科学者協会というのがありまして。そこに、左翼系のさまざまな団体が入っていました。夕方から夜に仕事の終わった人たちが来て、いろいろな勉強会が開かれていました。ある日、御茶の水の駅前で新聞の立ち売りをしている善明さんに気づきました。すごい気迫があって素敵だったんですよ。ですからよく目立ちました。そこにしょっちゅう現れるのがちひろさんだったわけです。ちひろさんはあの時代から見ると、びっくりするような感じで。たとえば、木綿のブラウスでも、自分でおそらくつけたんでしょうけど、レースがついていたり、リボンがついていたりするわけです。それがまたすごく目立ったんですね。ちひろさんと善明さんの結婚は、噂で聞きました。「もっていたお金を全部はたいて花買って、部屋を飾って結婚式をしたんだって」なんて、みんなびっくりしていたんです。あの当時の感覚からいったらそれは正常な神経とは思えないわけ。お金がいくらかでもあるなら、まず明日のためになんとか食べ物を確保するという時代ですから。でもわたくしは内心、「素敵だな、夢のある人だな」と思いました。それから、「大変だろうな、そういう人がこれから結婚して、ちゃんとして家庭生活をしていくのは」とも思いました。でもそうじゃない面もあったのね。ちひろさんが一生懸命支えて、彼を勉強させていたという話を後になって聞きましてね。いいご夫婦なんだな、と思いました。

証言2《加藤友子さん　1972年より松本家に住み込みで家事手伝いをした。ちひろ晩年の暮らしぶりを証言する》

いつもニコニコしてらしたから、悲しいとき、ちひろさんはいつ涙をこぼすんだろう、と思っていましたね。人間、嫌なことがあったりすると、ちょっと言葉が荒くなったりとか、顔にでたりしますよね。悲しいときにはなんとなく態度が変わったり。でも、ちひろさんはそういうことは絶対になかったですね。

なかなかお暇がなくても、庭にはお花が切れることはありませんでした。次々と植えてました。あと、庭に大きなイチョウの木が何本かあったんですよ。そのイチョウの葉っぱが落ちますよね、そうすると「掃かないでね、黄色い絨毯にしといてね」っておっしゃってね。イチョウの木の葉が落ちるときだけは、お庭掃除をしないようにしてました。(阿部恵)

## ちひろを訪ねる旅㊸

### 新宿・文化服装学院

文化服装学院と言えば、コシノヒロコ、ジュンコ姉妹や、高田賢三といった世界的に活躍するファッション・デザイナーを輩出した学校。1922年に創設された、日本で最初の服飾専門学校です。

いわさきちひろは、戦前の数年間、自身の書の師である小田周洋（しゅうよう）を手伝って、この文化服装学院で書の代稽古をつとめていました。

高級婦人服の仕立てに卓抜した並木伊三郎は、並木式原型と呼ばれる型紙を編み出すなど誰でもできる洋裁のシステムを普及しようと、1922年青山に文化裁縫学院を開きました。共同経営者は、幅広い人脈と経営手腕を持つシンガーミシンの遠藤政次郎。並木たちは同学院を、服飾文化を中心とした総合的な女子教育の場と考えます。こうした女子教育の場は、女学校卒業後の少女のさらなる学び、花嫁修業の場として、求められていました。創設時58人だった生徒は、翌年以降増えつづけ、1943年には3000人を超えて戦前のピークを迎えます。ちひろが代稽古をしていたのは、まさにこの時期。ちひろは中野の自宅からさほど遠くない、新宿南口の同学院（1927年に移設。現在の学院所在地）に通いました。

当時、山口県から同学院に単身入学し、ちひろの稽古を受けた桂美紀子は、生徒の間を回って見てくれる和服姿で笑顔のちひろを、姉のように慕っていたと言います。

小田周洋が、同校に書道教師として就任するのは1936年。同年の新任講師の担当科目には、書道、箏曲や茶道等のほか、教育学や応用美学、幅の広さがうかがえます。

ちひろは、女学校補習科のころに小田周洋に師事し、藤原行成流の和仮名の書を習いました。結婚でそれも一時中断しますが、1941年の夫の死後に再開、ひところは書家になることも考えていたと言われます。周洋自身が未亡人でありながら、書道教師として自立し、子どもと両親を養っていました。

1945年５月25日夜半、ちひろ一家が焼け出された山の手の大空襲は、モダンな夢を育んだ同学院も焼き尽くしました。　（竹迫祐子）

## ひとことふたことみこと

**3月1日（土）**
３月になるのを待ちわびていました。大好きなトットちゃんの展示、とっても良かったです‼　まだまだ雪が残っていますが、早く春が来てお庭で遊びたいです。娘もきっと楽しいでしょう。（希美･帆花）

**3月1日（土）**
世界の家に続いて世界ののりもの、楽しかったです。色々な角度で、絵本をとらえるのも、よいですね。想像の幅が広がります。

**3月4日（火）**
初めて読んだ日本の本が『窓ぎわのトットちゃん』で、ちひろさんの絵を初めて見たのも『窓ぎわのトットちゃん』でした。私にとってとても特別な１冊です。まさか、ちひろ美術館のある安曇野に住むことになるとは……。今日は、翻訳されたトットちゃんではなく、日本語のトットちゃんを読んでみようと思います。（お隣の国から）

**3月10日（月）**
雪がしんしんと降るなか、素敵な時間を過ごしました。静かに降る雪、ちひろさんの絵……、とても穏やかな時間でした。

**3月13日（木）**
山口県から来ました。頑張って来てよかった‼　“絵の具が水にとける”って本当にそうだなぁ、と原画を見て改めて思いました。描かれている子どもたちが、小学校で一緒に過ごした誰かと重なります。子どものやんちゃもかわいいのも、悲しいのも全部つまってるみたい。ちひろさんの絵がさらに好きになりました。５月、田植えが始まると山々が水を引いた田んぼに映ってキレイだと聞きました。また、来たいです。４月から小学校教員になります。今、ちひろさんの絵をたくさん見ることができて本当によかった。　（A.O）

**3月22日（土）**
小さい子どもたちの動作や楽しい表情の一つ一つが、自由で誰もが幸せな世界の大切さを痛切に訴えていると思い、なぜちひろがこんな絵を描けたのか、少しわかった気がします。今、社会は子どもたちののびのびした暮らしに反する戦争への道を進もうとする動きが目立ってきました。天国でちひろが言っているようです。「大人たちが、手を取り合い、子どもたちのいのちを守れるようにと訴え、平和を守る行動をとりましょう」と。
（山中）

## 美術館日記

**2月20日（木）**
３月１日からの開館に向けて急ピッチで準備を行う日々。展示室を除く館内の照明が、LEDライトに新たに取り変えられる。省エネ効果に加え、器具もスタイリッシュに。またミュージアムショップは、バナーデザインを一新。華やかな印象になり、スタッフにも大好評。

さらに、第一展示室の前に、ちひろの作品と一緒に写真撮影を楽しめる撮影スポットを設置。会期ごとに作品を変える予定で、今期は開催中の展示『絵本になった！「窓ぎわのトットちゃん」展』で展示中の「バラと少女」。来館の記念にぜひ、撮影していただきたい。

**3月1日（土）**
安曇野ちひろ美術館では、松川村にお住まいの全戸へ、５年間有効の優待券をお渡ししている。今日は、平林明人松川村長をお呼びして、セレモニーを行う。美術館の楽しさを知ってもらい、村民の皆さまに気軽に足を運んでいただければと願う。

**3月16日（日）**
今日は、年に一度の感謝デイ。日頃の感謝をこめて、入館料無料・フリードリンクのサービス。館内では、水彩技法を用いたにじみカードづくりや、クイズ大会、わらべうたあそび、おはなしの会などのイベントがたくさん。さらに今年は、南京玉すだれのパフォーマー・玉ちゃんがスペシャルゲストに。普段はなかなか見ることのできない日本の伝統芸能に触れ、子どもたちも大興奮だった。

**3月26日**
長野県北部地震で被災した栄村へ松川村中学校の生徒と義援金を届ける。復興が進み、次の一歩を踏み出している栄村。震災の際に見つかった古文書の資料館をつくる計画が、進行中だと聞いた。

## ●次回展示予定　2014年5月16日(金)～7月22日(火)

〈展示室1・2〉ちひろ没後40年

### ちひろの歩み －平和を願い子どもを描き続けた画家－

娘時代の戦争体験を経て、生涯にわたり「子ども」をテーマに描き続けたちひろ。父・正勝、母・文江と戦争との関わりなど、ちひろが生きた時代背景にも焦点をあてながら、被爆した子どもたちの手記を絵本にした『わたしがちいさかったときに』や、生命感あふれる子どもたちの姿を描いた代表作などを展示します。

つば広帽子の少女　1971年

〈展示室3・4〉ちひろ美術館コレクション

### びっくり！絵本動物園

ライオン、キツネ、カメ、鳥から、想像上の生き物である竜や人魚まで……。絵本には、さまざまな動物が登場します。同じ種類の動物でも、画家によって色や形、表情は異なり、個性豊かに表現されています。画家たちが趣向をこらして描いた約40種類の魅力的な動物たちをお楽しみください。

エリック・カール（アメリカ）
『ゆっくりがいっぱい！』（偕成社）より2002年

〈展示室5〉

### 絵本の歴史

## 安曇野ちひろ美術館　イベント予定

各イベントの予約・お問い合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。
詳細・最新情報はホームページからもご覧いただけます。　http://www.chihiro.jp/　TEL. 0261-62-0772　FAX 0261-62-0774

### ●国際アンデルセン賞受賞画家 ホジェル・メロが来館します！

5月17日（土）に作家と楽しむイベントを開催します。

**メロとつくろう！ワークショップ**

○日　時：5月17日（土）
　　14：00～16：00（予定）
○会　場：安曇野ちひろ美術館
　　多目的ギャラリー（予定）
○料　金：500円（入館料別）
○定　員：30名
○対　象：小学生以上（低学年のお子さまは、保護者同伴）
○申し込み：要事前予約（ちひろ美術館HP、TEL.0261-62-0772、美術館受付にて）

**ブラジルからやってきた！メロ、自作を語る**

○日　時：5月17日（土）11：00～11：40（予定）
○会　場：安曇野ちひろ美術館　展示室4
○料　金：無料（入館料のみ）
○定　員：なし
○申し込み：不要（参加自由）

### ●展示関連イベント 夜のミュージアムを楽しむ ブラジルの夕べ

企画展にあわせ、ブラジルの音楽や6月のお祭り「フェスタ・ジュニーナ」で飲むブラジルの飲み物などを、夜の美術館で楽しみます。

○日　時：6月21日（土）
　　17：00～21：00
○会　場：安曇野ちひろ美術館

### ●朝のミュージアムを楽しむ

7月20日（日）、21日（月・祝）は、朝8時から特別開館します。安曇野のさわやかな朝に、ゆったりと展示を鑑賞してみませんか。絵本カフェではおいしい目覚めのコーヒーをご用意します。

### ●ちひろの水彩技法ワークショップ にじみのうちわをつくろう！

昨年「カードづくり」や「しおりづくり」が好評だった、ちひろの水彩技法ワークショップを、バージョンアップして開催します。今回はうちわづくりに挑戦！これからの季節にぴったりの楽しいワークショップです。

○日　時：6月8日（日）
　　①11：00～12：30
　　②14：00～15：30
○会　場：安曇野ちひろ美術館
○料　金：500円（材料費込み・入館料別）
○定　員：各回10名
○対　象：小学生以上（低学年のお子さまは、保護者同伴）
○申し込み：要当日予約（各回30分前から美術館受付にて先着順）
※事前予約はありませんので、ご了承ください。

### ●〈館外展紹介〉山陽新聞創刊135周年記念 没後40年 いわさきちひろ展

主催：岡山シティミュージアム、山陽新聞社、ちひろ美術館

○会　期：2014年7月18日（金）～8月24日（日）
○会　場：岡山シティミュージアム
○開館時間：10：00～18：00（最終入館は17：30まで）
○関連イベント
　高畑勲（映画監督）による記念講演会「いわさきちひろとわたしたち」があります。
　日　時：7月20日（日）14：00～15：30
　会　場：山陽新聞社さん太ホール
　聴講料：1,000円（展覧会　観覧券付）定員300名
※展示イベントについてのお問合わせは、岡山シティミュージアムへ TEL.086-898-3000

### ●おはなしの会

毎月第2・4土曜日
11：00～
参加自由、入館料のみ

### ●ギャラリートーク

毎月第2・4土曜日
参加自由、入館料のみ
14：00～ちひろ展
14：30～世界の絵本画家展または企画展

CONTENTS

〈展示紹介〉ちひろ没後40年 ちひろの愛した アンデルセンと宮沢賢治／〈企画展〉ブラジルからやってきた！ 色彩の画家 ホジェル・メロ展／ちひろ美術館コレクション 世界の画家たちの愛した アンデルセンと宮沢賢治…❷❸❹
〈活動報告〉ちひろ没後40年記念出版について…❹
ちひろを訪ねる旅53／ひとことふたことみこと／美術館日記…❺

美術館だより　No.78　発行2014年4月21日

安曇野ちひろ美術館
〒399-8501　長野県北安曇郡松川村西原3358-24　テレホンガイド0261-62-0777　TEL.0261-62-0772　Fax 0261-62-0774
http://www.chihiro.jp/　E-mail:chihiroa@seagreen.ocn.ne.jp